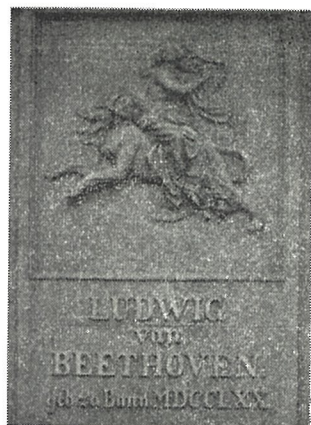




回想のドイツ

今井 晋

一度外国生活をしてみると誰でも結構愛国心が強まるものである。よその国をみても、「光の強きところ影もまた濃し」で明暗両相、長短両面を公平に見出して発奮もするかわりに安心もする。

関西のある実業家が訪欧して「日本では都市の中心に銀行がたっているが、欧州では教会堂がそびえている」と感心したそうである。大空に屹立する教会のタワーは、その清

澄な鐘の音とともにドイツの町々の魂に、精神的伝統の想起をうったえ、永遠への思慕をよびかけている。都会の世俗化に抵抗する美しいドイツの自然とともに、高い精神の支配を発見するときは嬉しいものである。乗物や郵便局の壁には聖書の言がはってあって、「スリ御用心」などを見出せないのは旅人には救いである。インテリは生涯に三度（洗礼堅信、結婚式）しか教会にはいかないなどとうそぶく声が聞えるほど宗教の沈滞が認められるのも否定はできないけれども、久しく宗教によって培われ支えられてきた高度の精神的雰囲気が個人のモラルを律し、社会公衆の秩序をまもっていることもあらそえない。

大学などでも神学や哲学などの有名教授の講義には、千人もの学生が席取競争にひしめき合う光景など、単なる知的関心のなせるわざでもなさそうである。私の居住したテュービンゲンの大学神学寮はドイツ随一の伝統を誇り、哲学者ヘーゲル・シュリング、詩人ヘルダーリン、天文学者ケプラーなどが青年期の教育をうけたところとして町の名前になっているのであるが、私の日本からの荷箱を税関にとりにいったとき、官吏はアドレスを見

て「神学寮は密輸をしない」とつぶやいて、ふたも開けずに持ってゆけと許してくれたことなど胸温まる思い出の一つである。このシユティフトは私の滞在中に定礎七百年記念式典を挙行したが、まさにけた違いの伝統に威圧される思いであった。もつとも伝統に甘えて、日曜の礼拝を告げる鐘が響きわたっても前夜のダンスの疲れで毛布をかぶって動こうともしない神学生も少からずいたのである。

ドイツ人は古いものを誇らしくまた懸命に保護しようとする。安いからといって古びた室を借りた友人が、室内でお米をたくとき貸主の老婆がいつも入ってきて壁をなでまわし、手がぬれると「水蒸気」と叫んでこわい顔をするので常に水をへらして「半にえご飯」しかたべられず、その上、水洗便所は音がするから睡眠を妨げぬよう十時以降は生理的要求をおさえられたと申し渡されて、遂にたまりかねて飛び出してしまったことがあった。私も週三度の掃除婆さんの闖入に業をやして、一度で結構と辞退すると、にらみすえられ「私の掃除はあなたのためではなく室のためにするのだ」と説諭されてしまった。美風もほどほどにと思ったことであつた。

西独の東独に対する繁榮は喧伝されるところであるが、確かに西独の生活水準は高い。

労働力が不足し南独ではギリシヤ人を集団で雇用する有様で、労働が高く女子でも工場で働けばかなりの給料が貰えるため、今日個人の家庭でメイドをやることはほとんど望み得ない有様である。無理して大学を出なくとも立派な社会人としての地位と暮しが保証されるわけで、したがって職業の貴賤などという觀念もないようである。有名なエヴァンゲリーリッシュ・アカデミーを訪れたときも、その幹部が案内しながら、通りかかった難役夫のおじさんをつかまえて「皆さん、この方がこの施設のなかで一番大事なひとなんです。この方がいないと一日も活動できないんです」と肩をかかえて紹介されたのを思い出して、「草のねもとの民主主義」とはこのほかのものかと感銘を深くした次第であった。ドイツ人の節約精神を日本人が少々でもまねたら国力の躍進疑いなし、という気がする。夫婦そろって死にいたるまでの計画経済で家庭をきりもりしているのではないかと、ときには空恐ろしくさえ感ずる。立派な招待状が舞いこみ、慣例にしたがい高価な花束を

かかえて勇んで訪れてみてもさっぱり御馳走が出ない。帰宅後食べ直しをすることもしばしばであった。この経験は時としてドイツ人同志でもなめさせられるようである。招待者がより徹底した美德の持主であった場合には、招待の楽しみは食事時にみなで話を交わすことにあるのだそうである。有難迷惑というものである。

子供を甘やかす日本のいわゆるパパ、ママ族に本当にまねてほしいことは子供のしつけである。ドイツの子供は社会公共のものでなる私有物ではないと考えられてでもいるのか、立派なしつけは親の社会に対する義務とされ、他人の子供でも遠慮なく叱りしつけている。家事の手伝いなども訓練として小さい時からやらせ、坂道で少女が乳母車を弓なりになって押していたり、バスの車内でゆられながら辛くも踏みこたえている健気な姿をよく見受ける。一つには体力、意志力の錬成ということでもあるらしい。帰途船中に乗りこんできた印度人の子供たちの放縦ぶり、乗客の艀壁を思い出しアジアのモラルということを考えさせられた次第であった。

日本人の言語下手は世界中何処へいっても

一々言いわけを必要としない程有名で都合がよいのであるが、それでもしやくに思うときがある。あるときのドイツのシュトゥーデスのコンテストで空の女王が選ばれた。写真でみるその容姿のすばらしさもあることながら、八ヶ国語を流暢にしゃべるといふ説明づきには再度うならされたことであった。しかし私は言語学のドクトルに日本語を教えることによってコンプレックスを解消した。言語自慢の彼は、今までロシア語フィンランド語などが一番難しいと思っていたら日本語はもっと難しい、言葉の切れ目がわかりにくい上に、きわめて、非論理的だ。「もち米」をつくのに「もち」をつくとはこれ如何に、と喰いついてきた。私は少しもあわてず「お前たちの汎論理主義ではつかわぬ神秘的な言語を自由に駆使するわが民族をもっと尊敬せよ」と答えておいた。ドイツ人全般の日本認識の驚くべき貧困、唯我独尊の自負心、度を過ぎた愛国心等にしばらくの共同生活のなかから発見された驚きの種も少なくないのであるが紙幅の制限で擲筆する。